

内在と超越

『社会現象学』の試み

橋爪大三郎

対談

大澤真幸

気鋭の社会学者、大澤真幸氏の『身体の比較社会学』が、このほど勁草書房から刊行された。身体という場に定位し、そこにあらわれる内在と超越の水準から、われわれの意識の全体をつかみとろうとする試みである。実質的な比較社会学的考察を導くための理論的な基礎を整備することをめざして書かれた第一部の刊行を機会に、著者の大澤氏と、同じく社会学者で新しい社会理論の構築に取り組んでいる橋爪大三郎氏に対談をお願いした。（編集部）

橋爪 今回は非常に大きい。も一級の仕事であると思いが、このドーンと出て、とても良書。今回の『身体の比較社会学』の1というところで、社会学やその周辺領域で、三、四年はみんな楽しめるのでは、ないかな。

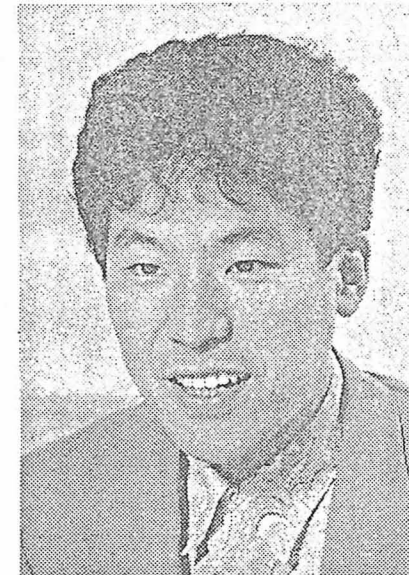
一読して思ったのは、まず、扱われている事柄が全体的であること。それから、論法が精密で、十分に反芻され練り上げられていること。その密

度に関して、社会学ではおそろしくベストと言っていると思いが、それから、議論の構成が非常に個性的であること。扱われている題材は、ある程度という問題に関心を抱く人、主眼点がま



橋爪 大三郎氏

☆はしづめ・だいさぶろう氏は東京工業大学助教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「言語ゲームと社会理論」「冒険としての社会科学」など。一九四八（昭和23）年生。



大澤 真幸氏

☆おおさわ・まさち氏は東京大学助手・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「行為の代数学」、共訳書にスペンサー—ブラウン「形式の法則」など。1958（昭和33）年生。

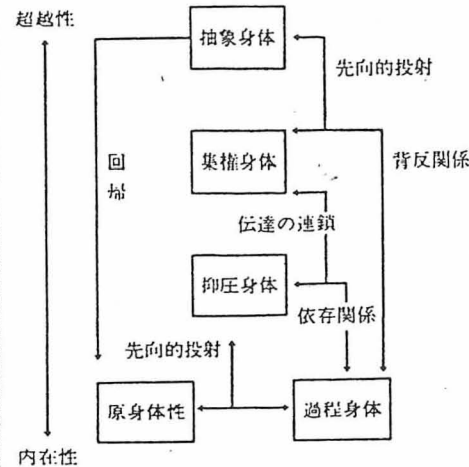
大澤真幸著『身体の比較社会学』をめぐる

原理的段階から社会全体へ

身体の発展形態と対応する形で社会現象を考察

ことを知らなくてはならない。他でもあり得たはずというところが見えてこない。自分がその内部に棲まっている場所を見えてこないと思

このことを知らなくてはならない。他でもあり得たはずというところが見えてこない。自分がその内部に棲まっている場所を見えてこないと思



第I巻の構想を图示したもの



A5判・416頁・4532円
勁草書房

毎週月曜日発行
定価 200円
（本体194円）

発行所
株式会社 読書人
東京都新宿区大塚町109
郵便番号162
電話(260) 579144
FAX(260) 5507
振替口座 東京5-57070
©株式会社読書人1990

大きな仮説を具体化

現象学的社会学の一番徹底した可能性

ここで僕が人間の超越性という問題についていろいろ考えているけれど、見田さんにとってみると——これはマルクスの考えかも知れないけれど——自然から人間が超越するということはある種の自明な前提になっている。だから僕の場合だと人間が自然から超越する仕方がもっと徹底して問われなくてはならないし、その仕方の様々な挫折と成功の歴史として社会というものを考えられると思うわけです。だから見田さんの問題は僕の中で変形されている。でも、それが引き継ぐということだと思いませんか。

橋川 内容の方に少し話を移しましょう。

この本の構成ですけれど、身体が一番原理的なプロセスからだんだんに、身体が、より大きな他者、あるいは異質性を含みこむ形で、社会全体に拡大していく過程のように思えたんですね。名前をいえば、「原身体性」、「過程身体」、「抑圧身体」、「集権身体」、「抽象身体」、こういう五つの身体のアイデアが提出されている。このプランで面白かったのは、これから出る続編で三つの社会の

タイプとして、原始共同体、専制国家、近代社会が理念的に挙げられていて、それがまさにこの本の中の身体の発展形態と対応する形で提案されている。ここが非常に著しい特徴というか、根本的アイデアだと思いませんか。今後書かれるであろうことも含めて、この辺についてちょっと話していただませんか。

大澤 僕が考えたのはこういうことなんです。身体の原理的なあり方を示している水準が、「原身体性」と呼んでいる水準と「過程身体」と呼んでいる水準なんですね。それらが独特な社会性を含みながら経験の中に統一を与える様式として、最初の超越性である「抑圧身体」を呼び寄せます。しかし「抑圧身体」は超越への離陸の程度において不完全であり、その不完全性そのものを原動力としてより包括的な「集権身体」が引き寄せられることがある。そして、

可能なものとして設置することができ。この本で描出した結論をマクロな社会現象の水準でも考えることができるに違いない、というのが僕の考えなんです。それでいまおっしゃっていただいたように、「抑圧身体」との関係で考えられる社会的な体験が、現象的には無文字社会と呼ばれている非常に小さな面識園

大澤 これは重要なポイントだと思います。さっき話に出た見田さんの場合だと比較社会学の構想は十本ぐらいあって、その中の一つに身体性比較社会学があるわけですね。実際に発表されたのはまだ「時間の比較社会学」だけなんです。僕の場合はそういう数ある比較社会学の一つとして「身体比較社会学」を考えているのではなくて、最も原理的に問われた比較社会学が必然的に身体比較社会学にならなければならないと考えているわけです。

それはどういふことがいふと、身体というものは二つの意味で我々が世界の中に内在していることを示す、その仕方そのものだと思いませんか。二つの意味というのは、一つは非常に簡単なことで、我々が諸々の事物の中に組み込まれている、事物たちの秩序と無秩序の系列の中に参入しているということ。もう一つは重要なことは二番目のポイントで、これは実はメルローポンティから僕が学んだことなんです。非常に広い意味での社会性というか、「私」というものが他者たちの系列の中に埋め込まれている、あただと思いませんか。さっき話に出た見田さんの場合だと比較社会学の構想は十本ぐらいあって、その中の一つに身体性比較社会学があるわけですね。実際に発表されたのはまだ「時間の比較社会学」だけなんです。僕の場合はそういう数ある比較社会学の一つとして「身体比較社会学」を考えているのではなくて、最も原理的に問われた比較社会学が必然的に身体比較社会学にならなければならないと考えているわけです。

対談 内在と超越 社会現象の試み

僕の場合にはむしろ社会性という関係の中に組み込まれて自然と人間との関係も論じられるような形にしたいというので、この本ではその線を考えているわけです。あと身体というところで重要なことは、いまもちょっとおっしゃった弁証法との関係でいへど、身体というのは非常に微妙な位置にあると思うんです。身体というのは経験された世界の中に我々が組み込まれているその仕方なんだというのを言いました。しかし一方で、我々の経験というのは経験としてのまとまりをもっているわけです。経験は断片化されているんじゃない、一個の秩序だった全体になっている。これはつまり、経験を断片として扱うのではなく、上から下という作用を立てる、こういう志向性、志向作用が

大澤 なるほど。身体とか志向作用の複数性という問題なんだけど、その場合、複数というのをどう考えるかが重要だと思いませんか。外から眺めて、一、二、三と数えられる身体があるという以上、その世界の中で暮らしている

用がどこかで働いているというのを意味するわけなんです。こういうものを私は「超越」と呼んだんだけれど、その超越の水準は天下の的に外からやって来るんじゃない、それ自身、身体的な認識とか態度とかの自発的な所産としてしかあり得ないような形でもたらされる。身体というのは原理的には内在性の水準なんだけれど、他方で経験に対する内在と超越という二つの水準が、その上でダイナミックに交錯するという面ももっています。そういう観点から大澤理論を見た場合、素朴な疑問として、他者という問題がここで本當にうまく解かれているのか、が一番大きな問題になってくる。身体の基本的な性能として、志向性を考えておられるのでしょうか。もし身体が複数あるとすれば、それは、

大澤 なるほど。身体とか志向作用の複数性という問題なんだけど、その場合、複数というのをどう考えるかが重要だと思いませんか。外から眺めて、一、二、三と数えられる身体があるという以上、その世界の中で暮らしている

「求心化」と「遠心化」

志向作用の固有化と非固有化の働き

大澤 なるほど。身体とか志向作用の複数性という問題なんだけど、その場合、複数というのをどう考えるかが重要だと思いませんか。外から眺めて、一、二、三と数えられる身体があるという以上、その世界の中で暮らしている

「ル」を置かざる場合、身
心から、しかもその生成論が
語りたくなければならない
ということに、これは本質的
な意味があるのか。私なら身
心がいづれもありましたとい
うところから素朴に始めます
がそれをあえてやらないで
る身体が社会を体験してい
ましたというシニエシス
(創世)の物語としてやると
いうのは、手前からやり過ぎ
ではないか(笑)、という気
をするのですが。

大澤 身体が複数ありまし
たというところから始めてい
るといって、僕もそうなん
で。ただその「複数ありまし
た」という言い方を、僕は求
心化とか遠心化という言葉に
分解して言っているわけで
す。それがまず一つ、それ
からもう一つは、じゃあこの
方法ではなくてという方法
をとかいうことが具体的に
問題になる。ルールや規範
や意味というところから考
える方法もあるわけけれど、
僕にはいろんな理由でそう
いって言葉が十分に自明なコ
ンセプトに見えなかったとい
うことなんです。もっと基礎
的な事実の水準に還元しなく
ては見据える可能性があると
いうので、こっちにしている
わけです。

橋川 結局、僕から見ると
大澤さんというのは非常にク
ラシクスタイルで、デリ
ダ風に言うところ「現前の形而上
学」ですか、そういうスタン
スを頑なに守って社会の実証
論を組み立てようとしている
と見えるわけですね。それは意
識的な選択だと思っただけ
で、非常に頑固な(笑)、よ
く理解できない選択だと思
うわけです。そうすると物語と
しては、内在と超越の物語に
ならざるを得ない。内在とは
身体から出発しようというこ
とで、出発点は身体の内側に
あるわけですね。その外側に何
があるのかわからないけれど、

ど、さしあたりそれを他者と
呼ぶわけですね。それとの間の
ダイナミズムということにな
る。だけれど身体の内側から始
める必然性は特になく、身体
の外側に何があるかをはじめ
に考えておいて、身体の内側
をそのぶん空虚にしておき、
そのダイナミズムを始めて行
くという選択だってありうる
わけですね。

「現前」という言葉
と「非現前」という言葉
との関係でいけば、「現前」
の中に回収できない部分、「非
現前」の部分が必要であると思
うんです。僕はそれを何とか

直接に組み込んだ議論に
した。それが求心化と遠心
化ということなんです。もし
「現前」という言葉と「非現
前」という言葉の対応
にたいしては、求心化は「現前」
に回収する部分なわけですね。
ところが「非現前」に回収でき
ない部分というのが必ずあ
ってそれを遠心化と名付けて、
それを単に指し示すだけでな
くそれがもたらす効果とか
結果とかを積極的に議論の中
に組み込んでいくような方法
にしたかったわけですね。

僕自身はむしろある時期に
構造主義的に考えていた時期
もあるし、フーコーなんか
いまでも積極的に好んでいる
つもりなんです。だから衝撃
を受けなかったんじゃないか
と。構造主義がある水準でも
いたもので構造主義以降の思
考をかなり積極的に評価して
いるつもりなんです。けれど
僕の考えでは、構造主義は厳
密な意味では「現前の形而上
学」をのりこえたとは思って
いないんです。構造主義の中
で問題になっている「構造」

出発点をどこにとるか

「非現前」を積極的に議論に組み込む

てみると、ヘーゲルの議論と
いうのがあって大澤さんも非
常に意識されておられる。ヘ
ーゲルの議論は、端的なもの
から極大なものにした上向
っていくというんじゃないか
と。僕は田舎にいたんです
ね。極端な作用領域から始
まってどんどん大きくなって
いくという構成をとっている
ように見える。でもそれは
よく、実はその出発点に、全
体を主宰している大きな視
点、外側の視点というものが、極
大の視点として絶対精神なり
神なりというものがある。そ
の外化と内化の過程はいつで
も繰り返行なわれていてグ
ルグル回るわけですね。い
っぽうマルクスの場合は、は
てさてないない。そうはな
っていないんだけれど、すべ
てをそこで生きた自然とい
う大きな土台がある。その
中に複数の身体があるとい
う構成になっている。

だから問題は、全体的な弁
証法と現象学の関係だと思
うんです。ヘーゲルの現象学
はフッサールの意味での現象学
じゃない。フッサールの意味
での現象学は一つの視点、一
つの視界、一つの身体とい
うものに、権利上の優先権を
おいて、そこから生成論によ
って上向していくというスタ
イルをとっている。こういう
スタイルの議論が、弁証法に
もつた全体論として成功す
るためには、どうしても外
へがいいるんです。権利上、内
在の領域とか身体の内側として
記述したもの以外に、絶対に
外へがいいるんです。その「外
へ」が、



橋川大三郎氏と大澤真幸氏

というところは確
かにその通りな
わけですね。発達
論というのは歴
史の事実の記述
みたいなもので
すから、偶然起
きたものを現
象を前提にして
説明することが
できる。たとえ
ば、子供に対し
てこれこれとい
うと、それは単
に行動が整
合的に噛み合っ
ているというこ
とではないわけ
です。単に物理
的なものとして
いるのかもしれないし、偶然
的なものかもしれない。それが
ルールだとして僕らにわかる
のは、僕らがある水準で内側
の視点をとっているからと思
うんです。それに対して普通

の理論というのは、内側の視
点と外側の視点をいませに
しているというところを
やっていると僕は思っ
て、直観的にい
え。橋川 ルールと内側の視
点の関係については、僕も賛成
です。ただ大澤さんの場合、
当事者の視点からしなければ
社会的リアリティは語れない
という、まことに重要な
指摘を、方法論的にうんと強
化して、現象学的なスタンス
にしていると思っ
たわけですね。

てみると、ヘーゲルの議論と
いうのがあって大澤さんも非
常に意識されておられる。ヘ
ーゲルの議論は、端的なもの
から極大なものにした上向
っていくというんじゃないか
と。僕は田舎にいたんです
ね。極端な作用領域から始
まってどんどん大きくなって
いくという構成をとっている
ように見える。でもそれは
よく、実はその出発点に、全
体を主宰している大きな視
点、外側の視点というものが、極
大の視点として絶対精神なり
神なりというものがある。そ
の外化と内化の過程はいつで
も繰り返行なわれていてグ
ルグル回るわけですね。い
っぽうマルクスの場合は、は
てさてないない。そうはな
っていないんだけれど、すべ
てをそこで生きた自然とい
う大きな土台がある。その
中に複数の身体があるとい
う構成になっている。

大澤 おっしゃっているこ
とはほとんど全部賛成です。
課題として考えていること
もまさにその通りであると思
います。つまり「外へ」とい
うのをどういうふうにか
の。僕の場合、それは実体化
されれば他者の体験というこ
とになって、それを様々な形
で利用したり、馴致したりし
ながら社会という様々な体験
領域が構成されていくと考
えているわけですね。それが比
較社会学になっていく。この試
みが本当に成功しているかと
うかにについては、これから先
をどれだけ実証をもった議論
として展開できるかという問
題とも関係があるので、この
後の展開を踏まえた上でまた
議論できればという感じがす
るわけです。

内的視点と外的視点

〈外〉をどのように考えるかが課題に

大澤 外的というものをど
ういう意味で捉えるかは非常
に難しいですね。外的視点と
いうのは物理現象を外から観
察しているというふうな意味
で外的ということではない
と思うんです。内的視点と外的
視点というのは単純に外在す
る関係じゃなくて、含み込む
という関係を持っているか
ら、外的視点はある意味で内
的視点を知っているわけ
ですね。知っているけれど、より
包括的な視点も知っている、
それが外的視点ということだ
と思うんです。

そういつか考える、
ある社会の中で外的視点が有
意味なものとして存在する
とすれば、そういう外的視点を
引き寄せるに足るだけの経験
の領域の拡張が必要にならな
いわけですね。そういう拡張
が起きて初めて外的視点とい
うものがその社会にとって有
意味なものとして存在し始
めるわけですね。たから外的
視点というものが何らかの形
で議論のなかで導入される
とすれば、それが導入される
に足るだけの過程をきちんと
議論のなかで主題化してい

なくてはいけな
いわけですね。外的視点と
内的視点のダイナミズムを
はじめから仕込んでおくとい
うのは賛成できない。
橋川 なるほど。ここが立
場の違いになっているらしい
ということでは、よくわかり
ました。

最後に全体の感想めいたこ
とを言うと、この書物はやは
り、弁証法的な全体論と思
うんです。弁証法的な全体論
が成功するためには、とい
うか成功していると思われる弁
証法的全体的成立を考
えて、

たと思うわけですね。これはた
いへん優れた方法だと思っ
たけれど、一方でその時に
設定されているある種の事
実、ルールであるとか制度で
あるとか十分に説明項にな
るにふさわしい実体である
どうかというところに疑問を
持っていました。確かにそれ
以前の議論ももっていた矛盾
のりこえるものではあつたけ
れども、のりこえついでにそ
の矛盾を全部ルールとか制度
に押し込んで解消してしま
ったのではないかな。だから僕は
もっと基礎的なカテゴリーか
ら説明されなければならな
いと考えたわけです。

橋川 ルールが、本当はも
っと基礎的な過程があるはず
のところを、ある意味でい
えはガサツにまとめあげたもの
だということに、僕は異論な
いんです。ただそれは、何か
を説明する際の効率の問題と
して、私は出発点としておい
ているんだと言っている。こ
れを認めた上で、大澤さん
の議論に対する疑問なんです
が、身体の還元できない原理
的なプロセスを、もし、大勢

いる身体としての個々人の経
験論、あるいは発達心理学的
な発達論として議論している
んだからまことによくわか
る。だけれど、それはルールに
完全な代替する原理のプロ
セスに、みだりに言われちゃ
うとわかりにくい。発達論と
大澤理論はここが違うとい
う。発達論であれば身体を
外側から見る視点が常に用
意されていて、その観察にと
って、ある未熟な心性が問題
になっているわけでしょう。と
ころが大澤さんはまさに未
熟な心性のド真ん中に視点が
あって、そこから社会の側に
出ていくという考え方なんです
ね。ここがたいへん違う。
ややこしい印象を受けて
しまったのは、この本に挙げ
られている素材はほとんど視
点を身体の外側にとったもの
なんです。それを全部大澤
理論の、内在と超越の用語に
置きかえる作業として、この
本が組み上がっている。そこ
が読んでいる、やや疲弊した
ところなんです。

大澤 ここで意図している
のが発達論的な記述ではない
と思うんです。

大澤 僕は、僕から見ると
大澤さんというのは非常にク
ラシクスタイルで、デリ
ダ風に言うところ「現前の形而上
学」ですか、そういうスタン
スを頑なに守って社会の実証
論を組み立てようとしている
と見えるわけですね。それは意
識的な選択だと思っただけ
で、非常に頑固な(笑)、よ
く理解できない選択だと思
うわけです。そうすると物語と
しては、内在と超越の物語に
ならざるを得ない。内在とは
身体から出発しようというこ
とで、出発点は身体の内側に
あるわけですね。その外側に何
があるのかわからないけれど、

直接に組み込んだ議論に
した。それが求心化と遠心
化ということなんです。もし
「現前」という言葉と「非現
前」という言葉の対応
にたいしては、求心化は「現前」
に回収する部分なわけですね。
ところが「非現前」に回収でき
ない部分というのが必ずあ
ってそれを遠心化と名付けて、
それを単に指し示すだけでな
くそれがもたらす効果とか
結果とかを積極的に議論の中
に組み込んでいくような方法
にしたかったわけですね。

僕自身はむしろある時期に
構造主義的に考えていた時期
もあるし、フーコーなんか
いまでも積極的に好んでいる
つもりなんです。だから衝撃
を受けなかったんじゃないか
と。構造主義がある水準でも
いたもので構造主義以降の思
考をかなり積極的に評価して
いるつもりなんです。けれど
僕の考えでは、構造主義は厳
密な意味では「現前の形而上
学」をのりこえたとは思って
いないんです。構造主義の中
で問題になっている「構造」